

佼成会の場合は、復興支援事業を「こころ ひとつに」プロジェクトという名称で立ち上げた。佼成会の会員が文字通りこころひとつになって救援・復興活動に取り組み、様々な関係者、諸団体とも協力していくことを目指すというプロジェクトである。震災の発生直後から庭野会長が「被災地の皆様へ」と題した談話をホームページ上あるいは教団紙上で発表し、立正佼成会東日本大震災対策本部を設置した。また、翌月から善友隊というボランティア組織を作り、援助とニーズアセスメントのため現地に派遣している。「一食を捧げる運動」という1970年代からの活動による一食平和基金を活用し、緊急支援に5億円の拠出を決定して、4月から5月にかけて被災地の各自治体や現地で活動するNGO団体に義捐金を贈呈して回った。また、3月末から被災者援助を目的として佼成会会員のボランティアを多賀城市に派遣し、その後は東松島市、釜石市、大槌町の社会福祉協議会と協力してボランティア活動を行なった。4月1日には東京都の佐藤副知事に、被災者受け入れ用の宿泊施設の提供として、杉並の本部にある第二団参会館(地方から出てきた会員が宿泊する施設)と、青梅市にある青梅練成道場の提供を申し出ている。

活動の具体的な内容は配布した資料をもとに説明する。まず①「人的支援(善友隊の派遣)」ということで、職員がコーディネーターに立って会員のボランティアを現地に派遣し、泥かきやがれきの処理から始めた。各地方に教会等活動のセンターがあるので拠点として利用でき、ボランティア派遣にあたって非常に役に立った。延べ5千名を超えるボランティアを2泊3日、もしくは3泊4日の行程で、それぞれの被災地に派遣することができた。また、佼成会の中に佼成カウンセリング研究所という専門の施設があるため、石巻と釜石の教会からのニーズを受け、カウンセラーの派遣(カウンセラー善友隊)を実施し、現在も継続的に展開している。

②被災者の受け入れということでは、石巻教会・釜石教会を指定避難所として提供して約300名、白河・喜多方・会津・水戸・大宮・大田の各教会および第二団参会館で約120名の被災者を受け入れた。仙台教会は震災直後、一般市民への炊出しの提供場所になっている。青梅練成道場を仮設住宅用敷地として提供することを都に申し出たが、実際にはまだ使用されていない。やはり政教分離的な問題があるのではないと思われる。

③財的支援ということでは、行政や外部団体への拠出、善友隊派遣や物資提供など諸活動への拠出、あるいは東京佼成ウインドオーケストラによる被災地でのチャリティコンサート開催支援等、様々な方面に一食平和基金を活用した拠出活動・支援活動を行なった。

④医療支援(佼成病院)では、現地へ医師・看護師を派遣し、往診や薬の処方等を実施した。また、週末の2泊3日で「やわらぎツアー」というツアーを組み、第二団参会館で被災者を受け入れてマッサージやお風呂でゆっくりしていただき、その中で医療ケアもするというプログラムが展開されている。

⑤文化的貢献では、心のやすらぎということで、6月以降に八戸市・仙台市・いわき市・大船渡市でコンサート活動を実施した。

⑥現在の取り組みとしては、「こころ ひとつに」プロジェクトの大きな枠の中で、この

宗教者災害支援連絡会 第8回情報交換会議事録 H24年3月18日 (文責：井関大介)
「東日本大震災発生以後の1年を顧みて」
赤川恵一氏(立正佼成会)

3月から「こころホット」ボランティアという名称で、釜石市を中心に茶話会や子供達へのケアといった現地の社会福祉協議会が担う活動への協力をしている。これは長期的に取り組む予定であり、今は本部職員のプロジェクトチームが定期的に派遣されているが、今後は佼成会の職員や会員がボランティアベースで現地に入っていくという活動に発展していく見込みである。

3月11日には東京都杉並区の本部施設において、東日本大震災犠牲者慰霊並びに復興祈願の法要が執り行われた。